王羲之を「尺牘」にみる

田淵保夫

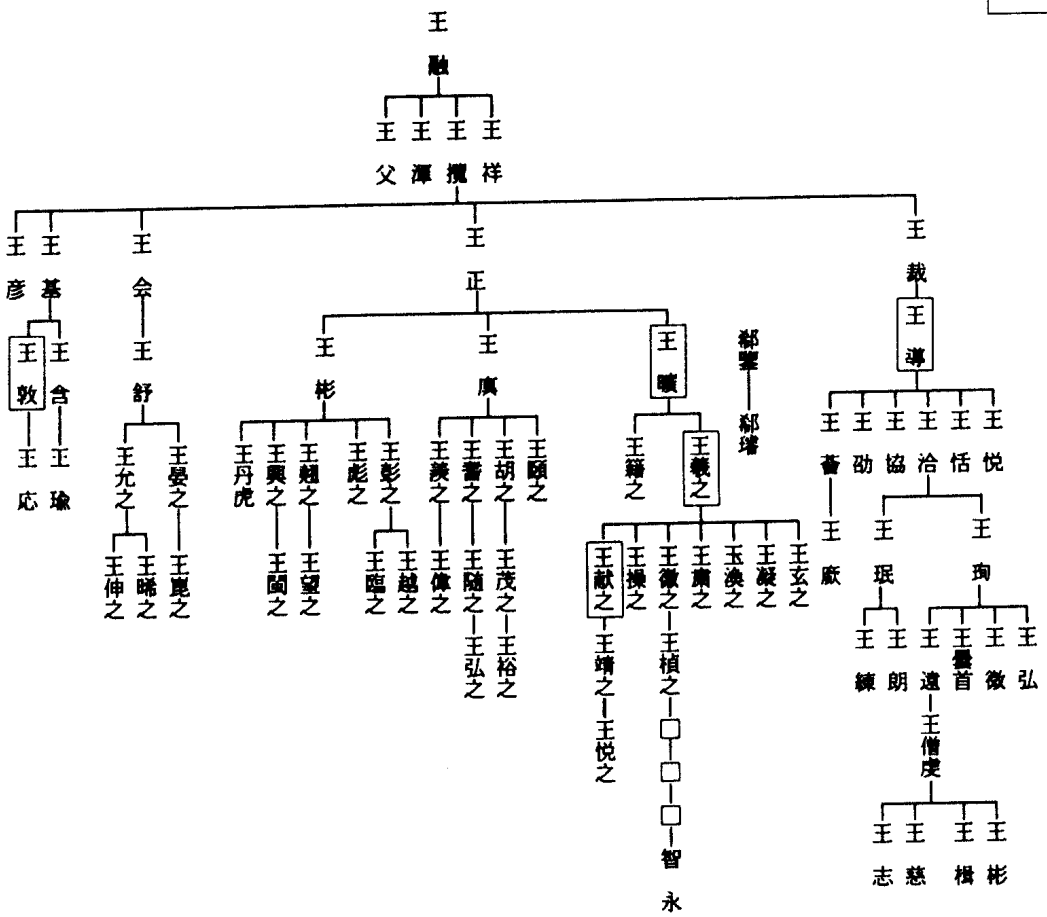
はじめに

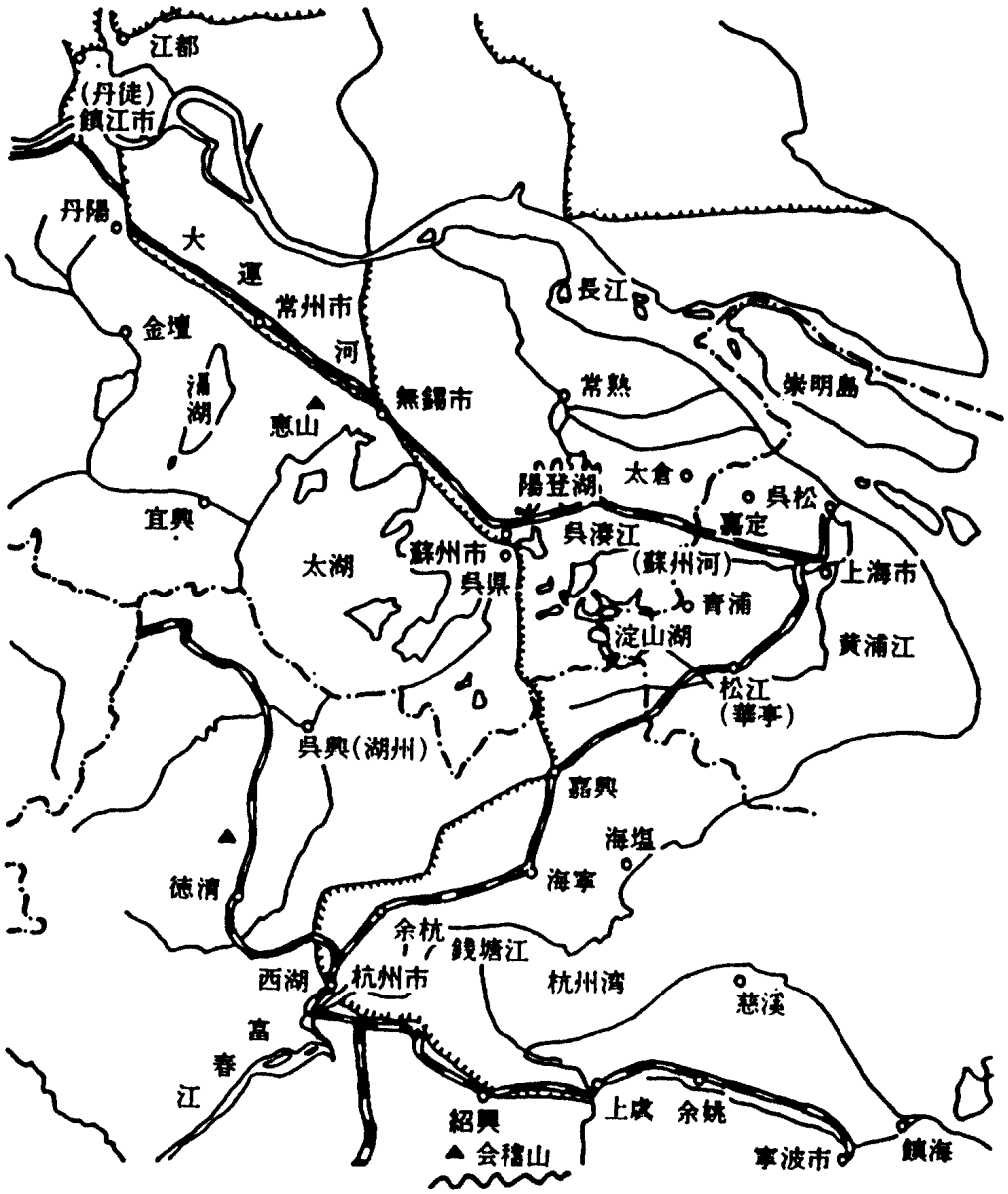
王羲之は書聖とよばれ、子息の王献之と共に二王とよばれた書道上における偉大なる書人として評価されている。また、東晋時代（三一七―四二〇）不滅の書業を成し遂げた書人としてなかば信仰的な立場にいる人物でもある。

王羲之は山東省琅邪出身の王一族の出である。字を逸少という。右軍将軍に就任しているところから、王右軍とも称されている。永嘉元年（三〇七）に生れ、興寧三年（三六五）五十八才で没した。四十四才のとき右軍将軍、会稽山陰内史となって在任四年、郡の管理行政に携わっている。

王羲之一族には極めて秀れた能書家が存在していた。家系図にあるとおり、伯・叔父から従兄弟等多数にのぼる。当時は名士の資格として「書をよくする」風習があり、書道が尊重された時代によく合致したことでもある。従って当時の最高の貴族としての優雅な生活の中で能書家として成長したものと考えられる。

王氏家系


王融
王父
王渾
王攬
王祥
王彦
王基
王敦
王応
王含
王瑜
王会
王舒
王允之
王伸之
王晞之
王晏之
王崑之
王正
王彬
王丹虎
王興之
王顗之
王翹之
王望之
王彭之
王彰之
王臨之
王越之
王廙
王羨之
王偉之
王書之
王隨之
王弘之
王胡之
王茂之
王裕之
王頤之
王曠
王籍之
王羲之
王献之
王靖之
王悅之
王操之
王徽之
王楨之
□
□
□
智永
王肅之
玉渙之
王凝之
王玄之
郗鑒
郗璿
王裁
王導
王蕃
王庶
王劭
王協
王洽
王珉
王練
王朗
王珣
王遠
王僧虔
王志
王慈
王楷
王彬
王曇首
王微
王弘
王悅
王恬


江都
(丹徒)
鎮江市
丹陽
大
運
河
常州市
金壇
湯湖
惠山
無錫市
長江
常熟
崇明島
陽澄湖
太倉
呉松
嘉定
宜興
太湖
蘇州市
呉県
呉淞江
(蘇州河)
上海市
青浦
淀山湖
黄浦江
松江
(華亭)
呉興(湖州)
嘉興
海塩
徳清
海寧
余杭
銭塘江
西湖
杭州市
杭州湾
慈溪
富
春
江
紹興
上虞
余姚
会稽山
寧波市
鎮海

西晋――東晋時代の図

王羲之は鍾繇・李斯・蔡邕等の系統から――衛夫人[1]に学び、叔父の王廙の影響があったとされる。身近かな環境としては、王導[2]（父の従兄）その子の王洽、孫の王珣があり、叔父の王廙が強く影響を与えたとされる。王一族に対して劣らぬ謝氏（謝安）や羲之の妻の系統――郗氏一族（郗鑒・郗愔・郗超）の三代にわたる能書家も少からず影響があった。

王右軍は人格が格調高い人物として、また、書跡をとってもみごとな書風を確立した書聖として高い位置づけをされている。

しかし、反面硬骨漢としての人間像・病弱な面をみせている人物像がみえかくれしている点があまりとりあげられていない。

父王曠をはじめ、王氏一族が山東琅邪の地を離れ、王導の先導のもと、揚子江下流の揚州・建業（南京）地区に進駐した。琅邪[3]王の新政権のもとに結集した時に生まれたのが王羲之であり、男子として一身に一族から将来を嘱望される立場にあったことも羲之の成長には欠かせない要因があったであろう。

ここに、書聖の内面についての手がかりを得るために、

「王羲之尺牘集」「世説新語」にみられる羲之の人物像にふれてみたい。

尺牘集は羲之の友人・身近な人達への手紙であり、それに書かれた内容にふれながら、病弱な体であったこと、薬用に努力していたことなどが浮き彫になればと考える。

また、世説新語からみた羲之は幼少から優れた資質と、その生活態度が如実にうかがい知ることが出来るので、この両面を対比することで、羲之の人物像の内面を少しでも探り、客観的に書聖を分析してみたいと思考する。

(一)、羲之の尺牘集[4]

(1) 奉橘帖（其二）

羲之白す、不審尊体このごろ復た何如、復た告を奉ずるをまつ、羲之冷に中りて無頼なり、尋いで復た白さん、羲之白す。

（其三）

橘三百枚を奉る、霜未だ降らず、未だ多く得可らず。

羲之敬白。貴殿の体の具合はいかがですか。お知らせください。羲之は服用した薬で体が冷え、苦しんでいます。ひきつづきまた申しあげます。

みかん三百個を献上します。まだ霜が降らず、たくさん取ることができません。

(2) 初月帖

初月十二日、山陰羲之報、近欲遣此書、停行無人、不弁遣信、昨至此、且得去月十六日書、雖遠為慰、過嘱卿佳不、吾諸患殊劣々、方渉道憂悴、力不一一、羲之報。

初月十二日、山陰羲之報ず、近ごろ此の書を遣らんと欲するも、停行して人無く、信を遣わすを弁ぜず、昨此に至る。且つ去月十六日の書を得たり、遠しと雖も慰と為す。過ねて嘱す卿佳なるや不や、吾れ諸患殊に劣々たり。方に道を渉りて憂悴す、力めて不一一、羲之報ず。

(3) 快雪時晴帖

羲之頓首、快雪時晴佳、想安善、未果為結、力不次、王羲之頓首

羲之頓首、快雪　時に晴れて佳なり。想うに安善ならん、未だ結を為すを果さず、力めて不次、王羲之頓首。

(4) 旦極寒帖

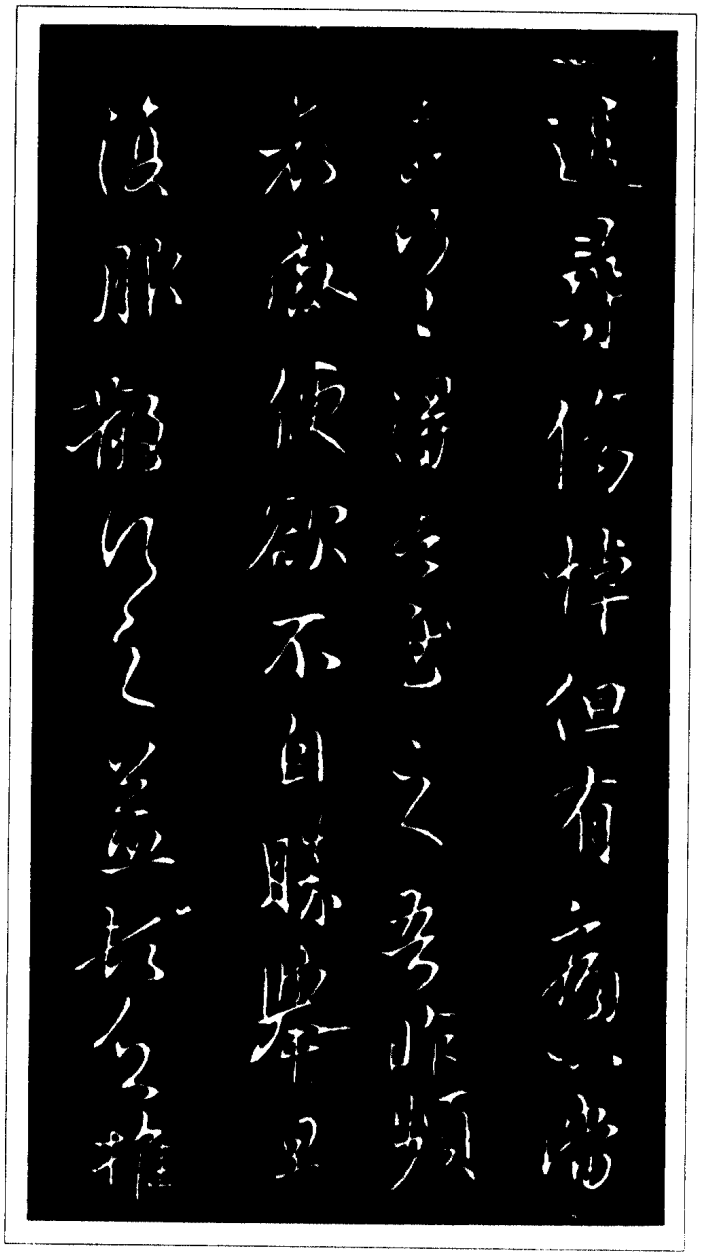
旦極寒、得示、承夫人復小欬、不善得眠助、反側想小尓、復進何薬　念足下猶悚息、卿可不、吾昨暮復大吐、小噉物、便尓、旦来可耳、知足下念、王羲之頓首。

あした極めて寒し、示を得て、夫人の復た小しくそうせるを承る。善く眠助を得ず、反側す。想うに小しくしかり、復た何の薬をか進めん。足下の猶お悚息せるをおもう。卿は可なりやいなや、吾れ昨暮復た大いに吐き、少しく物をくらえば、便ちしかず、旦来らば可なるのみ。足下の念を知る、王羲之頓首。

(5) 追尋傷悼帖

追尋傷悼、但有痛心、当奈何々々、得告慰之、吾昨頻哀感、便欲不自勝挙、旦復服散、行之益頓乏、推理皆如足下所誨、然吾老矣、余願未尽、唯在子輩耳、一旦哭之、垂尽之年、将無復理、此当何益、冀小却漸消散耳、省卿書但酸塞、足下念顧言散、所豁多也、王羲之頓首。

追尋傷悼帖



追尋傷悼し、但だ痛心有り、当にいかにすべき、告を得て之を慰む、吾れ昨、頻りに哀感し、すなわち自から挙ぐるに勝えざらんと欲す。旦に復た散を服す、之を行するに益ます頓乏す。理を推すに皆な足下のおしうる所の如し。然れども吾れ老いたり、余願は未だ尽さず、惟だ子輩に在る耳、一旦に之を哭す、尽くるになんなんとするの年に、はたまた理無からんや。此れ当に何の益なるべきや、こいねがわくば、少却して漸く消せん耳、卿が書を省するに、但だ酸塞有り、足下はかえって散を言うを念うも、ひらく所多き也。王羲之頓首。

(6) 雨快帖

三月十六日、羲之白、一昨省不悉、雨快、君可不、万石転差也、灸得力不、得後問、懸悒不去懐、君云、当有旨信、遅望其至、僕劣々、故遣不一一、還具示、王羲之。

三月十六日、羲之白す。一昨の省はつくさず、雨快し、君、可なるやいなや、万石はうたたいゆる也。灸力を得るや不や、後問を得ず、懸悒　懐を去らず、君云う、当に旨信有るべしと、其の至るを遅ち望む、僕劣々なり。故に遣わして一一せず、復た具示せん、王羲之。

(7) 適得書帖

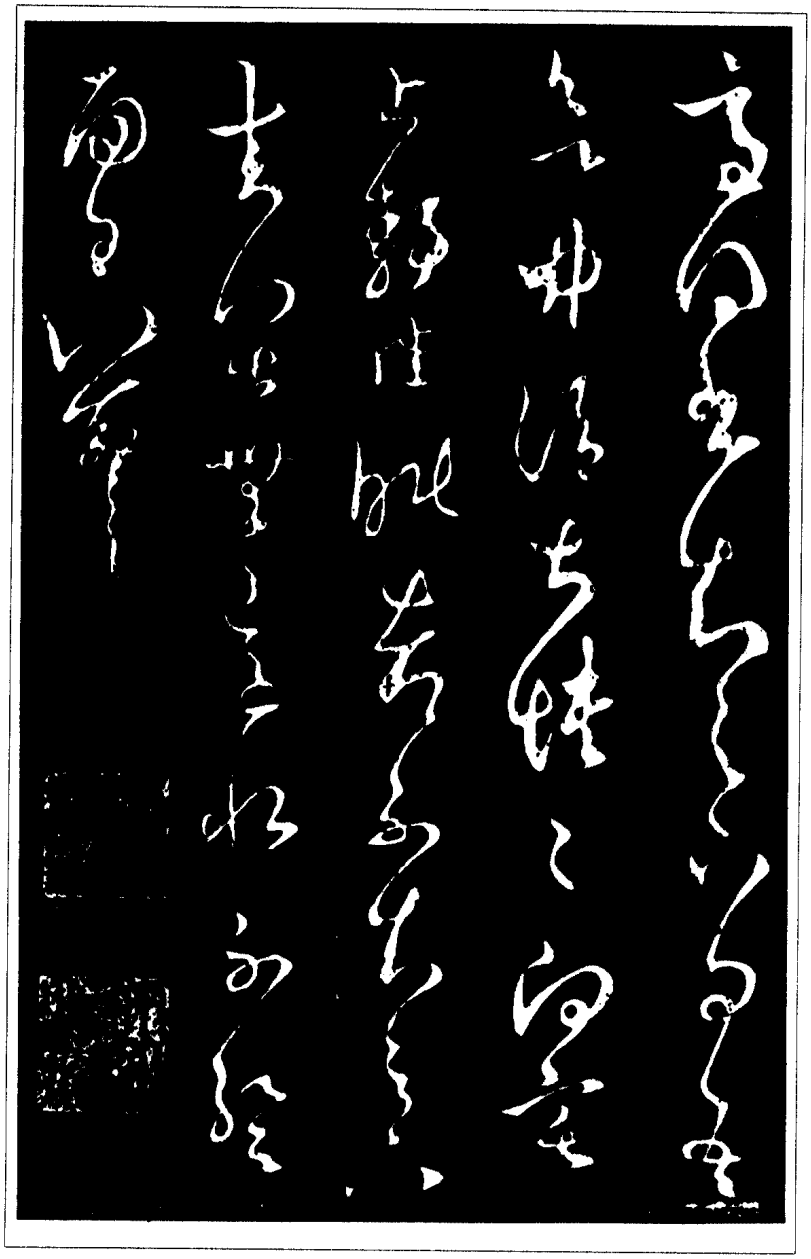
適得書、知足下問、吾欲中冷(5)、甚憒々、向宅上静佳眠、都不知足下来門、甚無意、恨不暫面、王羲之。

たまたま書を得て、足下の問を知る。吾れ冷(6)にあたらんと欲し、甚だ憒々たり、宅上において静かに佳眠し、すべて足下の門に来るを知らず、甚だ意無し、暫くも面せざるを恨む、王羲之。

(8)

喪乱帖（其一）

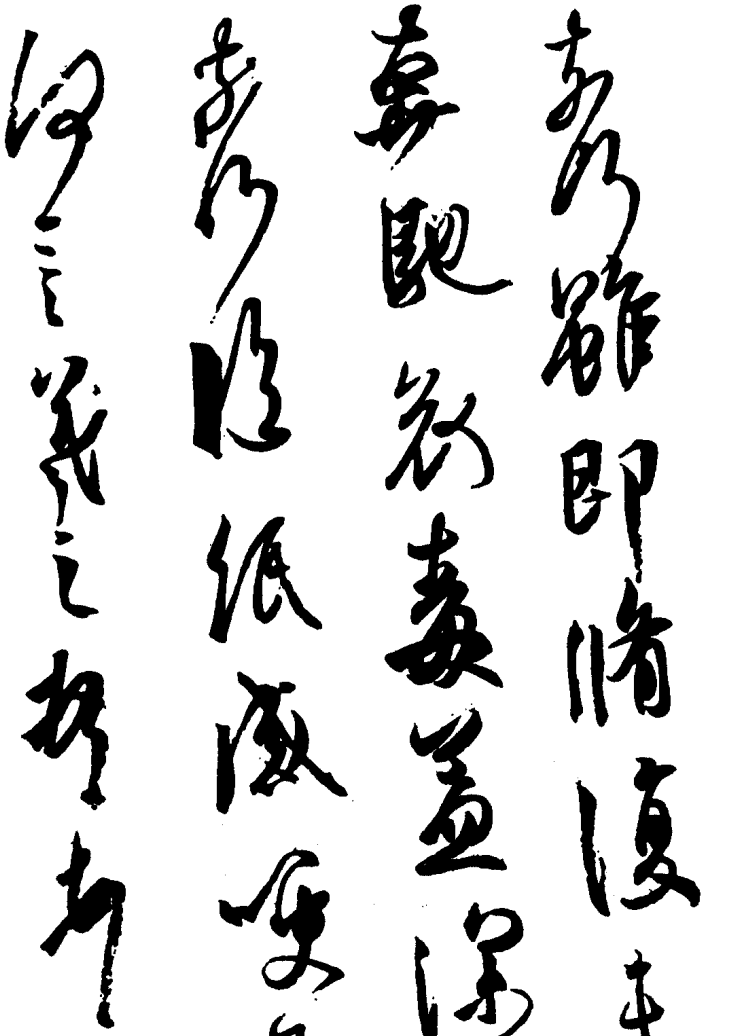
羲之頓首、喪乱之極、先墓再離荼毒、追惟酷甚、号慕摧絶、痛貫心肝、痛当奈何奈何、雖即脩復、未獲奔馳、哀毒益深、奈何奈何、臨紙感哽、不知何言、羲之頓首頓首。



適得書帖

羲之頓首、喪乱の極み、先墓　再び荼毒にかかる、追惟すれば酷甚だしく、号慕摧絶し、痛　心肝を貫く、痛　当にいかんすべき、いかんすべき、即ち脩復すると雖も、未だ奔馳するを獲ず、哀毒　益ます深し。奈何せん。奈何せん、紙に臨んで感哽し、知らず　何をか言わん、羲之頓首頓首。

喪乱帖



(二)、世説新語[7]にみられる王羲之

(1)

大将軍[8]（王敦）は右軍（羲之[9]）に告げた、「お前は我が一族の立派なわかものだ。決して阮主簿[7]（阮裕）にも劣るまい」

(2)

「殷中軍[10]（殷浩）、王右軍を道ひて云ふ、逸少は清貴の人なり。吾之に於いて甚だ至り、一時に後るる所無し、と。」殷中軍である殷浩は王右軍を評して「逸少は高尚で上品な人物だ。わしは彼を甚だ敬愛しており、その点では、当世の誰にもまけないつもりだ。」

また、気高くさわやかで、風格があり風俗と異っていたと推察される。

(3)

「殷中軍[11]、右軍を道へらく、清鑒貴要なり」

即ち、見識明るく、高貴な人だと評している。

(4)

「王右軍[12]、東陽を道へらく、我が家の阿林は、章清はなはだ出づ、」と。

我が家の阿林（王臨之）はそのすっきりとした気高さが人にぬけ出している。

(5)

「謝[13]公の王右軍に与ふる書に曰く、敬和は棲託好佳なり、」

謝公（謝安）の王右軍にあてた手紙にいう、
「敬和（王洽）は身心のおきどころがまことによい」
と諸公子のうちでも特によい評判であった。

(6)
「王右軍[14]の少き時、丞相云ふ、
逸少は何に縁りて復古萬安[15]に減ぜんや」と。
王右軍の若いころ、丞相（王導）はいった。
「逸少はどうしてまた万安に劣ろうか。」

(7)
「王右軍[16]郗夫人……」
王右軍の郗夫人（郗鑒の娘）

(8)
「王黄門[17]兄弟三人、俱に謝公に詣る。子猷・子重は多く俗事を説き子敬は寒温のみ。」
王羲之の子息徽之・操之・献之の三人がそろって謝公（謝安）を訪問した。
徽之と操之はしきりに世間話をしていたが、献之は時候のあいさつをするだけだった。
謝公は「吉人の辞は寡く、躁人の辞は多し」

「小さい（献之）のが一番すぐれている。」と評している。

(9)

「王[18]右軍、少き時甚だ澀訥なり。」

王右軍は若い時、たいへん口が重かった。

大将軍（王敦）のところにいたときのことであろう。

(10)

「王[19]右軍年十歳より減ずる時、大将軍甚だ之を愛し、恆に帳中に置きて眠らしむ。大将軍嘗て先づ出で、右軍猶ほ未だ起きず。須臾にして銭鳳に入り人をしりぞけて事を論じ、すべて右軍が帳中に在るを忘れ、便ち逆節の謀を言ふ。右軍覚めて既に論ずる所を聞き、活くる理無きを知り、乃ち剔吐して頭面被褥を汗し、詐って孰眠す。敦事を論じて半に造り、方めて右軍が未だ起きざるを意ひ、相與に大いに驚いて曰く、之を除かざるを得ず、と。帳を開くに及び、乃ち吐唾従横なるを見、其の實に孰眠せるを信じ、是に於て全きを得たり。時に其の智有るを称す。」

王右軍が十歳にならぬころ、大将軍（王敦）は非常に彼を愛し、いつも帳の中に寝かせていた。ある時大将軍は起き、王右軍がまだ起きていなかったところへ、急に銭鳳が入ってきて、人をさけて相談をはじめ、右軍が帳の中にいることをすっかり忘れて反逆の計画を話した。右軍は目をさまして二人の相談を

聞いてしまったので、助かるはずがないことをさとり、指をのどに入れてへどを吐き、顔やふとんを汚して熟睡しているふりをした。

王敦は右軍がまだ起きていなかったことに気づき、銭鳳と大いに驚いて言った。「この子を生かしておけぬ。」帳をあけると、そこらじゅう反吐や唾だらけなのを見、ほんとうに熟睡していたものと、信じたので、王右軍はやっと助かることができた。当時の人は彼の賢さをほめたたえた。

(11)

「王右軍[20]は謝太傅（謝安）と共に冶城[21]に登る。謝悠然として遠くを想ひ、高世の志有り。王謝に謂ひて曰く、夏禹[22]は勤王して、手足胼胝（へんち）し、文王は旰食して、日に給するに暇あらず。今四郊壘多く、宜しく人人自ら効すべし。而るに虚談もて務を廃し、浮文もて要を妨ぐるは、恐らくは當今の宜とする所にあらじ、と。謝答へて曰く、秦商鞅[23]に任じて、二世にして亡ぶ。豈に清言患を致さんや、と。」

王右軍は謝安と共に冶城に登った。謝は悠然として遥かに想いを馳せ、世俗を超越した志があった。王右軍は謝に問う。「夏の禹は手足をタコができるほど王事に励み、文王はいつも日の暮れるまで食事をする暇がなかった。今、都の周辺には土壘が多く、人々は進んで国のために力を尽くさねばならぬというのに、空言を並べて務めを怠り、実のない文字をつづって要務を妨げているの

は、おそらく時宜に適った事ではなかろう。謝安は答えた。「秦は商鞅を登用したが二代で亡んだ。どうして清談の災いといえようか。

(12)

「王逸少[24]、会稽と作り初めて至るに、支道林至り、孫興公王に謂ひて曰く、支道林は抜新領異、胸懐及ぶ所乃ち自ら佳なり。卿見えんと欲するやいなや、と。王、もとより一往の儁気ありて殊に自ら之を軽んず。後、孫と共に載りて王の許に往くに、王、都て領域し與に言を交えず。須臾にしてしりぞく。後、正に正當に行かんとするに値ひ、車已に門に在り。支、王に語りて曰く。君未だ去るべからず、貧道、君と小しく語らん、と。因って荘子逍遥遊を論じ、支数千言を作す。才藻新奇にして花爛映発なり。王遂に襟を披き帯を解きて、流連して已む能はず。」

王逸少が会稽内史となって初めて赴任した。そこに支道林[25]がいた。孫興公が王にいった。

「支道林は斯新異色な人であり、懐いている思想は立派なものですが、会ってみたいとは思いませんか。」

王逸少はもともと一徹な気性があって、支道林などまるで問題にしていなかった。後に支道林と孫公とが一緒に車で王を訪ねたが、王は堅く心をとざして言葉をかわそうともしないので、支道林は辞去した。

後に逸少が出かけようとしているのに会い、車はその門に用意されていた。

支は王にいった。

「お待ちくだされ、拙僧はしばらくあなたとお話がしたいのじゃが。」

そこで『荘子』の逍遥遊を論じた。支は数千言を述べたが、その言葉は才気満ちて新鮮で、百花繚乱の趣があった。王はそこですっかり胸襟を開いて、いつまでも立ち去りかねた。

(13)

「庾公云ふ。逸少は国挙なり、と。故に庾倪、碑文をつくりて云ふ。抜萃国挙。」[26]

と。

庾公（庾亮）が云った。

「逸少は国家的人材として挙用されるべき人物だ。」

そこで庾倪は碑文に「抜萃国挙」と誌した。

(14)

「時人王右軍を目すらく、飄として遊雲の如く、矯として驚龍の若し、と。」[27]

(三)、尺牘集にみられる王羲之の人物像

1、奉橘帖では自分が服用した薬で体が冷え苦しんでいる。みかんを三百個献上します。まだ霜がおりないので、たくさん取ることが出来ない。そのうちにたくさん取るようになったら又送りましょうといった感じを述べてい

る。

2、初月帖では近頃手紙を出そうとするが、行程がとどこおり、人手もなく使いの者もやる事ができない。

貴方からの手紙は遠く離れていますがとても慰められました。相手の体を気遣うなかで、自分の体は体力的に劣り旅をしたので憔悴しきっている。相手の健康を気遣っている反面、自己の体調の悪さを率直に語っている点が気になるところである。

3、快雪時晴帖は烈しい雪がやんで、晴れ間も出て気持ちよい。相手との約束が果たせないでいることに気配りをしている「優しさ」をみせている。

4、旦極寒帖は極めて寒い時季です。手紙によると承夫人の咳こんでおられることを知り、眠ることや寝返りをすることも思うにまかせないことへの心配を示し、どんな薬をすゝめているのかと案じている。

これは自分の体調と薬の関係を基調にして考えているもどかしさがうかがえる。

また、自身は昨夜たいへん吐いた。少し食べるとすぐそうなる。明け方になると多少良くなるのだが、相手の気持ちを察しつゝ自己の心配もしている。結局は体調に対する薬用の効を考えている感じである。

5、追尋傷悼帖は昔を思えば歎き悲しみ、心痛あるのみだ。昨日から哀しい気持で体を起すこともできない状況を云い、朝散薬を服すとまず疲れることを訴えている。貴方から教えられた通りになりますよ。

自分は老いぼれてしまったので期待するものは、子供たちだけです——平凡な親の気持ちを見せながらも自分の健康に対して自信のなさが読みとれる。

また、少し引きこもって体調を整えることと共に悲しみもうすらげたいと思っている。貴方の手紙をみると悲しみで胸が痛むし、粉薬のことでは以前からやりとりすることで同情しあっていることが窺える。

6、雨快帖は一昨日の見舞いは意を尽せなかった。萬石は次第に快方にむかっているからご安心をといった内容だが、「灸」についてふれている点はみのがせない。

即ち、灸の効果を言っているものと思う。そして、再び自分の体力のおとろえが原因で手紙そのものの意を尽せないのが残念であると結んでいる。気力と体力が一致しないところはっきりと出ている。

7、適得書帖はたまたま手紙を受取ってみて、あなたのお尋ねを知りました。自分は服薬行散してぼんやりして家の中で静かに眠り尋ねて来られたことを知らなかったと詫びている。

家内の誰かが取次ぐことなしに来客を帰したことは、休養をとって眠る「時間」が必要であったことへの弁明であろうか。

8、喪乱帖は天下大乱のきわみ、先祖の墓がまたひどい目にあった。思いおこせば、あまりにひどく、そして大声で泣き慕い心は砕けんばかりの悲痛な思いで一杯だと述べている。

次に、墓を修復したがそれについては悲しみが強いのでまだ行っていないと言う。哀しみの強さを物語っている証であろう。そして「どうしたらよいでしょう、どうしましょう。」と便りをしたためながらの歎息ぶりがうかがえる。

これらから推察するならば、地元の人達に北からの移住者の王一族がまだ受け入れられていない点に気がかりが有る歎きでもあると思う。古くからの土地の人達との接点に苦労していることゝ、自分がどう対処できるか、どう対処したらよいのかを考えあぐねている心情がうかがい知れるところである。

体力的に劣り、薬の服用も効がうすく精神面でも可成り沈んでいる状況が察知できる。王右軍が会稽内史としての郡の責任者になっているが、その実自分の体が本質的に病弱であることを気にしている点が目立っている。

王羲之略年譜

三〇七	永嘉元年	出生	
三二二	永昌元年	王敦謀反	
		秘書郎	
三三四	咸和九年	臨川太守（江西省）	
		王導丞相、右軍は建康政府入りを固辞	楽毅論　三四八
		寧遠将軍江洲刺史（重慶市）	遊目帖
			十七帖
三五一	永和七年	右軍将軍会稽内史	孔侍中帖
			喪乱帖
三五三	永和九年	蘭亭叙	蘭亭叙　三五三
三五五	永和十一年	会稽内史辞職	黄庭経　三五六
			東方朔画賛　三五六
三六五	興寧三年	五十二歳没	曹娥碑　三五八

現代社会でいうならばやゝ言いすぎになるかもしれないが「○○症候群」「ノイローゼ」に近い症状であったかもしれない。

いずれにせよ平常における病弱な身で、可成りの薬用による体調に留意している点は着目する要がある。我々書道に志す者としては書跡から窺い知る羲之と、尺牘集の病弱な右軍とは結びつかない。

気力と体力との総合からくる王右軍の書は内に病弱である点はあまり問われていない。信仰的に王書がすばらしいものとして無条件で受け容れられている。

今後もっと資料的なものから、王羲之の薬用の点を推量していきたいものである。

㈣、世説新語にみられる王羲之の人物像

1、王敦[28]（羲之の叔父）は「王一族の中で立派な若者であり、阮王簿にも劣るまい」と認めている。

2、殷浩[29]は「逸少は清貴の人、高尚で上品な人物だ」気高く爽やかにして風格があると評している。

3、王導は「逸少は何に縁りて復古萬安に減ぜんや」「逸少は萬安に劣らない人物とみている。即ち、羲之の若い頃は一族からみて、気骨があり、人品高貴な人物として評価をうけていたとみられる。特に王導は先述の如く、羲之の父王曠を含めて、北の山東半島の琅邪の地、そして、都洛陽から南の地建業（南京）に一族を引きつれて移住した一族の中心人物である。そのリーダーの目にも羲之は好ましい若者と映じていたとみられる。

4、王敦と銭鳳の内密[30]な話をしている時の話がおもしろい。十才にならぬ羲之は王敦に可愛がられて同居していた。帳の中に寝かせられていたが、銭鳳が訪れ王敦と密議中の話を寝たふりをしていて全部聞いてしまった。主及び

銭はそれに気づき確かめたが、逸少は熟睡したふりをしていたが、我が身の危機を悟り「指をのどに入れて、などを吐き、顔やふとんを汚して熟睡をしていたふりをした」とある。

十才そこそこの少年が、話の内容は謀反のための密議であることを見抜き、身の危険を感じとったこと自体物事に対する見極めに秀れていたことの証明になるだろう。単に寝たふりではなく、物を嘔吐することでいかにも正常な状況でなく、身体の異状さの中で寝ていたので何も聞いていなかった状況を作り出していることは年少の子の考えつくことではない。幼い頃の逸話としては大人物としての折紙つきのものであろう。

5、王右軍が謝安と共に冶城に登った。その折の二人の対話の中で、

「夏の禹は手足にタコができるほど王事に励み、文王はいつも日が暮れるまで食事をする暇がなかった。今、都の周辺には土壘が多く、人々は進んで国のために力を尽くさねばならぬというのに、空言を並べて務めを怠り、実のない文字を綴って要務を妨げているのは時宜に適った事ではなかろう。」と問いかけている。紹興の会稽山陰に右軍として職務につき、正義感からみた感懐を示している場面である。

6、右軍は、会稽内史となって赴任した当時の気性については、一徹なところをみせ、周囲の人との胸襟を開こうとはしなかったようである。支道林と逸少との出会いでも当初は逸少の無視にあい、次の「荘子」の逍遥遊を論ずる場でやっと胸襟を開いたとある。

7、庾公は「逸少は国家的人材として挙用さるべき人物だと述べ「抜萃国挙」と碑文に誌したとある。逸少の才気あふれる人物評として興味深い評である。

8、逸少の幼い時は、たいへん口が重かったようである。王敦のところにいた時の事のようであるが「王右軍、少き時甚だじう訥なり。」とある。極めて口が渋りて口重きなりの意のようである。この観点でみると内面をあま

り見せず、じっくりと思考を整えてから決断する気質を持ちあわせているものと思う。従って書跡の筆法を重ねあわせてみると、粘着性をみせる筆勢、そして字形の整斉美などから考えて「その人なりの気性と筆跡」は相似するものである。

おわりに

世説新語からみた羲之の人物像は気性のしっかりした、明晰さが浮彫にされた。また、尺牘集における羲之は、病弱な一面をみせる中で、薬を服用しながら、日常的な心情は誠に哀しさ、もどかしさ等優雅な貴族というより一般人の心情がみえかくれする側面をみせて興味深いものがある。

一説によると子供の時に癲癇にかゝり、ひどいどもりになったという。また、子供のころから人前で話をすることも好まず引込み思案になっていたともいわれる。

このような少年時代から成人になるには、それなりの精神的変化があったのであろうが、資料が少く確定的なことが言えない。一方では蘭亭叙をはじめとする書業は限りなく多く、中国・日本の書道文化には絶対的な影響力をもった人物であることは確かである。

書の中心的人物であるだけに、今後もう少し具体的な面を摘出して王右軍の書と王右軍の人物像の相関を見極めたいと考えている。

あまりにも神聖化されてしまうと本当の意味での作品の評価も美化されすぎることになる。真実が一つでもわかればその意義は大きい。今後の取組みにもうひとつはずみをつけたいと考えている。

注

(1) 筆陣図を書き後世に影響をもつ、汝陰太守李矩の妻（二七二～三四九）
(2) 琅邪王（司馬睿）をたすけ、新政権の創業の功臣
(3) 司馬睿――八王の内乱後――東晋の元帝、在位六年
(4) 書学大系第十六巻（同朋舎出版）
(5) 中冷――服薬行散のこと――魏晋の貴族に流行した長生薬の五石散か。飲むと全身が発熱し、その後寒気がしてくる。
(6) 注5に同じ
(7) 新釈漢文大系上・中・下（明治書院）
(8) 世説・賞誉篇55
(9) 王敦は羲之の叔父
(10) 世説・賞誉篇80
(11) 〃 〃 100
(12) 〃 〃 120
(13) 〃 〃 141
(14) 世説・品藻 28
(15) 〃 賞誉 88
(16) 〃 賢媛 25
(17) 〃 品藻 74
(18) 〃 軽詆 5
(19) 〃 仮譎 7
(20) 〃 言語 70

(21) 呉の時代銭の鋳造所
(22) 禹は洪水を治めて手足に豆を作り、足を引きずり歩いたの伝がある。
(23) 衛の庶子・秦代の孝公の宰相
(24) 世説・文学 36
(25) 支遁
(26) 世説・賞誉 72
(27) 世説・容止 14
(28) 9に同じ
(29) 殷中軍
(30) 王敦謀反の件
(31) 26に同じ

参考文献

書学大系（同朋舎出版）
世説新語（明治書院）
中国書人傳（中田勇次郎著）中央公論社
新中国書道史（有朋堂）
書道全集（平凡社）
書道芸術（中央公論社）
中国書論大系（二玄社）
書跡名品叢刊（二玄社）
名蹟碑帖大成（省心書房）